

えびの市教育研究センター

I	研究主題と副題	8-1
II	主題設定の理由	8-1
III	研究の概要	8-1
1	研究の目標	8-1
2	研究の仮説	8-1
3	研究の内容	8-1
4	研究の全体構想	8-2
5	年間計画	8-3
IV	研究の実際	8-3
1	スピーチ活動について	8-3
2	研究の取組	8-4
	(1) 実態把握	
	(2) 指導のポイント	
	(3) ワークシート	
	(4) 評価	
3	各学校における実践	8-8
	(1) A小学校における実践	
	(2) B小学校における実践	
	(3) 他校の実践	
V	成果と課題	8-10
1	成果	
2	課題	
◇	引用・参考文献	8-10
◇	研究同人	8-10

I 研究主題と副題

確かな学力の定着と地域に貢献する人材の育成 ～言語活動を通じたコミュニケーション能力の育成を目指して～

II 主題設定の理由

今日、我が国はグローバル化、情報化が進行し、著しい変容を遂げている。その中にある児童生徒は、今後ますます自主性や判断力を迫られる状況にあるとあってよい。

本市は、県西部に位置し、緑豊かな霧島山麓に囲まれ、農林業がさかんである。地区育成会の活動も活発で、児童生徒が高齢者からさまざまな年中行事を教わる光景も見られる。さらに、地域を大切にす風土が次世代にも受け継がれているとあってよい。しかし、児童生徒数は今後、緩やかな減少傾向が予想され、人間関係の固定化や希薄化などに起因するコミュニケーション能力不足は、本市の教育上の課題の一つとなっている。

そこで、市教育研究センターでは、「主体的な学びを通して自分とふるさとに誇りを持ち、夢や希望をもって語り合える児童生徒」をめざし、キャリア教育の視点に基づいて3ヶ年計画で研究することにした。初年度となる昨年度は、「基本的な生活習慣」と「学力向上」を本研究の基盤（「学びの基本づくりプロジェクト」）として取り上げ、市内全小・中学校を挙げて取り組んだ。各学校でも既に取り組まれている内容が多かったが、市内共通の目的意識をもって共通実践していくことで、児童生徒に変容が見られただけでなく、教職員の意識を一つにできたことは大きな成果となった。引き続き、本年度も各学校で発達段階の実態に応じた実践を行っている。

昨年度、教職員を対象としたアンケートでは、スピーチ活動の重要性を挙げる意見が多く見られた。また、本年度より本市では、児童生徒一人一人にきめ細かな指導を行っていく目的で「30人学級制度」が導入された。この制度により学級担任が新たに採用され、採用された講師からスピーチ活動について悩んでいるという声が寄せられた。そこで、本年度は「話すこと」「聞くこと」が中心となるスピーチ活動を、児童生徒側・教職員側それぞれの視点から工夫・改善することにより、スピーチ活動が効果的に運用・実践され、本市の課題の一つであるコミュニケーション能力の育成が図られるのではないかと考えた。

以上の考え方にに基づき、本研究主題・副題を設定した。

III 研究の概要

1 研究の目標

- スピーチ活動の工夫・改善を通して、話す・聞く能力の向上を図る。

2 研究の仮説

- スピーチ活動を、実態に基き、9ヶ年を見通して意図的・計画的に行えば、児童生徒に、コミュニケーション能力の基礎を形成することができるだろう。

3 研究の内容

<3ヶ年計画>

(1) 1年次

市内全小中学校における「学びの基本プロジェクト」の実践（試行）を通じた、基本的な生活習慣の定着と基礎学力の向上

(2) 2年次

「1分間スピーチ」を中心とする言語活動を通じたコミュニケーション能力の育成

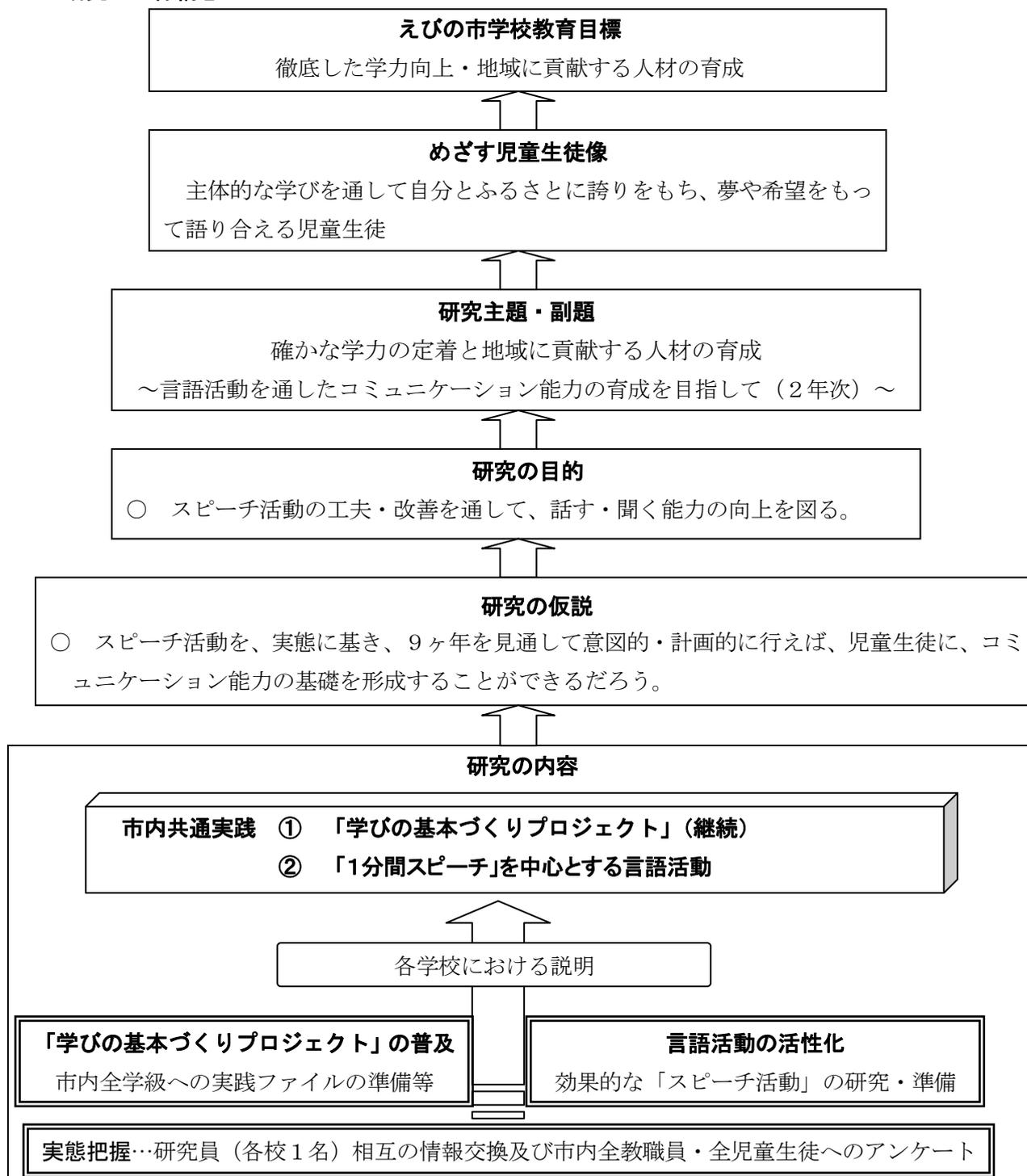
(3) 3年次

えびのの良さを見つける目の育成、えびのについて語り合える力の育成

<今年度の研究内容>

- 「学びの基本づくりプロジェクト」の効果的実践に向けての計画・準備
- 本市児童生徒の、スピーチに関わる実態把握
- 「1分間スピーチ」の効果的実践に向けた計画・準備

4 研究の全体構想



5 年間計画

月	研究内容	月	研究内容
6月	研究の方向性の検討 「学びの基本づくりプロジェクト」 の進捗状況確認	11月	各学校での実践
7月	先行研究（言語活動）からの学び 研究内容・研究方法決定	12月	各学校での実践 実践を通しての検証とまとめ
8月	アンケートの作成・スピーチ活動に 関わる実態の調査	1月	まとめ（研究紀要）の作成 発表準備
9月	アンケート結果に基づく実態把握 具体的実践に向けての計画・資料準備 （指導用資料やワークシート等）	2月	発表準備 アンケート作成 次年度に向けての評価
10月	各学校での実践に向けての資料準備	3月	反省及び次年度の計画

IV 研究の実際

1 スピーチ活動について

学習指導要領の総則には、配慮すべき重要な事項として、児童生徒の言語環境を整え、言語活動を充実させることが掲げられている。もちろん、「言語活動」を広義で捉えれば、児童生徒は学校で日常的に話を聞く、教科書を読む、ノートに文字を書く、などの「言語活動」を行っている。しかしながら、えびの市が目標とする「地域に貢献する人材の育成」に資するためには、ある程度焦点を絞り、意図的・計画的に言語活動を行わなければその活性化や充実を図ることは難しいと考えた。特に、児童生徒が主体的に学ぶ中で思考力、判断力、表現力等を高めていくには、音声言語を用いて互いの考えを伝え合うことが不可欠である。

そこで、今年度は昨年度から開始した「学びの基本づくり」の基盤の上に、音声言語によるコミュニケーションの基礎としての「スピーチ活動」に焦点をあてて実践的研究を進めていくこととした。その中でも比較的取り組みやすい「1分間スピーチ」に焦点を絞り、市内の学級担任を中心とする指導者が、「これならばぜひ使ってみたい」と思えるような、利便性のある資料等を作成することを主眼において調査、研究、準備等を開始した。

2 研究の取組

(1) 実態把握

スピーチ活動の研究を進めて行くにあたって、各学校の実態を把握することで、より具体的かつ効果的な取組につながっていくと考え、えびの市の全小中学校児童生徒に対して、8月～9月にかけて次のようなアンケートを実施し、以下のような結果を得た。

① 小学校（5校、869名に実施）

アンケート項目	1年	2年	3年	4年	5年	6年	全体
スピーチをすることが好き。	72%	56%	50%	55%	48%	18%	48%
スピーチが難しいと感じることがある。	42%	29%	44%	48%	42%	56%	57%

【難しいと感じる主な理由】

- ・ テーマを考えること
- ・ 内容を考えること
- ・ 思ったことを言葉に表現すること
- ・ 文を構成すること
- ・ 具体的に話すこと
- ・ 人前で話すこと など

(考察)

低学年から中学年の児童は、「人前でスピーチをすることが好き」と感じている児童が過半数を占める。しかし、高学年になると「スピーチを難しい」と感じる児童は少なくない。高学年では、スピーチするテーマや内容を自分で考えるようにしている学級が多い。発達段階として人前で話すことに抵抗を感じていることも理由として挙げられるが、自らテーマを考え、文を構成し、相手を意識して伝えることが、「スピーチは難しい」と感じる大きな理由となっている。

このことを踏まえ、児童がスピーチ活動により取り組みやすくするための手立てを工夫していくことが今後重要であることが分かった。

② 中学校（4校、382名に実施）

アンケート項目	1年	2年	3年	全体
今年度になってスピーチ活動をしたことがある。	65%	99%	85%	84%
スピーチをすることは自分のためになっている。	85%	81%	90%	85%
スピーチを聞くことは自分のためになっている。	88%	81%	87%	84%

【どんなことが自分のためになっているか】

- ・ 人に説明する力がつくこと
- ・ 自分の考えを短い時間にまとめること
- ・ 面接の練習になること
- ・ 友人の考えや思いが分かること
- ・ 知らなかったことを知ること
- ・ 友人のよいところを学べること

(考察)

スピーチ活動はえびの市の中学生のうち8割以上、2年生はほぼ全員が取り組んでいることが分かった。そのうち、スピーチをすることや聞くことについて8割以上の生徒が「自分のためになる」と考えている。

このことを踏まえ、1年生と3年生の担任にスピーチ活動を取り入れるように呼びかけるとともに、より充実したスピーチ活動のための効果的な方法を紹介していくことが今後重要であることが分かった。

(2) 指導のポイント

ア 指導内容の洗い出し

スピーチ活動は、国語科の「話すこと」「聞くこと」と大きく関わってくる。それぞれ

の学年でどのようなスピーチを行えばよいかについての教師用マニュアルがあると、スピーチ活動が取り組みやすく、また、効果的なものになるのではと考えた。

そこで、学習指導要領の「話すこと」「聞くこと」（小学校低学年～中学校3年）の指導内容を9ヶ年が見通せる形で洗い出しを行った。その指導内容をもとに、スピーチ活動においてそれぞれの学年でどのような指導を行えばよいかを「指導のポイント」として一覧表にまとめた。その一部が下記の表である。

学年	話すこと	聞くこと	ワークシート番号	スピーチ評価表
(小)低学年	<p>*身近なことや経験したことなどから話題を決める。</p> <p>①身近なことについて話す。 ②事柄の順序を考えて話す。</p> <p>【話す内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「いつ」「どこで」「だれが」「なにを」「どうした」などの話型に気を付けて話す。 ・ 「はじめに」「つぎに」「それから」「さいごに」などの順序を示すことばを使って話す。 ・ そう思ったわけを入れて話す。 <p>【話し方】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ からだを聞いている人にむけて話す。 ・ せなかをまっすぐにして顔をあげて話す。 ・ 口を指 2 本ぶんあけてお腹から声を出す。 ・ ていねいな話し方で話す。 	<p>*大事なことをおとさないように聞く。</p> <p>【ポイント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 話す人の目を見ながら聞く。 ・ せすじを伸ばして聞く。 ・ 「なるほど」と思うところでうなずきながら聞く。 ・ 大事なことは何か、考えながら聞く。 	スピーチのもと ①～②	<p>話す内容 レベル 1～2</p> <p>話し方 レベル 1～4</p> <p>聞き方 レベル 1～4</p>

資料1【指導のポイント（指導者用資料）】

イ 「指導のポイント」活用の仕方

「指導のポイント」の一覧表は、指導する側が9ヶ年の系統性を見通しながら、指導のポイントをしぼり、スピーチ活動を少しでも取り組みやすくすることをねらって作成したものである。

「指導のポイント」の表は、「話すこと」と「聞くこと」に分け、小学校低学年・中学年・高学年、中学校1年・2年・3年の各学年で身に付けさせたい「話すこと」「聞くこと」の指導内容を具体的に示している。

「話すこと」では、学習指導要領に基づき、「話す内容」と「話し方」に分けて重点的に指導したい内容を、「聞くこと」では、それぞれの発達段階で身に付けておきたい聞く姿勢や態度を「ポイント」としてまとめている。

また、「話す内容」が児童生徒に身に付くように指導内容をワークシートに盛り込み、「スピーチのもと」として10項目作成した。（後述）それぞれの学年で使える「スピーチのもと

と」の番号をこの表に掲載し、指導する側が活用しやすいように工夫した。

さらに、「話す内容」・「話し方」・「聞き方」の段階が児童生徒にも教師にも一目で分かるように作成した「スピーチ評価表」（後述）で活用できるレベルも一覧に示すことで、発達段階に応じた具体的な指導ができるようにしている。また、9ヶ年の指導内容が見通せることで、まだ身に付いていない内容を取り上げたり、発展的に指導をしたりすることもできる。

人前で自分の考えや思いを短い時間で語る「スピーチ」は、小学校低学年の話し方、中学生の話し方が決まっているわけではなく、低学年で身に付けた話し方は、大人になってからも使うことがある。小学校中学年以降の児童生徒は、話したい内容によってレベル1からの話し方を自分で選び、うまく活用することで自分の思いを話せるようになってほしい。そのため、中学年以降の「スピーチのもと」「スピーチ評価表」の項目には、低学年レベルの内容も含んだ形で掲載している。

上記のような取組を通して、各学年で話す内容をしっかりと身に付け、伝えるべき内容にふさわしい話し方やより魅力的に伝わる話し方を選んで話すことができる児童生徒を育てたい。

(3) ワークシート

児童生徒に1分間スピーチをどのように取り組ませるか、指導する際の具体的な手立てがあれば、自分の思いや考えを自信をもって話すことができるのではないかと考え、「スピーチのもと」と「すごろくトーク」の2種類のワークシートを作成した。

「スピーチのもと」は原稿やメモとして活用でき、「すごろくトーク」はゲーム感覚でスピーチに取り組めるものであり、課題として与えるテーマの参考になるものである。

ア 「スピーチのもと」

発達段階や話す能力の実態に応じて指導者がシートを選択し、児童生徒に事前に記入させることで、ポイントをおさえた分かりやすいスピーチができるように工夫した。

メモとして活用する程度にしたり、しっかり書き込ませて原稿としてスピーチに活用させたりするなど児童生徒の話す能力に応じて活用ができるよう幅をもたせた。

本市の実態調査により自らテーマを考え、文を構成し、相手を意識して伝えることがスピーチを行う上で難しいと感じている傾向がみられた。そこで「スピーチのもと」の内容や形式を工夫することにより、スピーチへの抵抗感をなくすことができるのではと考えた。

内容は経験したことや紹介文、インタビューしたり、調べたりしたことについて話せるようにした。5W1Hやナンバリングなどの話型をもとに理由や具体例をあげて話せるような形式にした。

また、スピーチの方法や話し方のポイント、メモの活用方法などを例示した「話すワザ」を作成し、1分間スピーチの取り組み方の参考となるようにした。教室に掲示したり児童生徒に配付したり活用できるものにした。

イ 「すごろくトーク」

話をするのが苦手な児童生徒にも楽しく自分を語れるような内容にするために、「すごろくトーク」を使用する。予めとったアンケートから分かった実態をもとに、児童生徒が興味をもち、友達に聞いてみたいという内容を「すごろくトーク」に盛り込んだ。

また、「すごろくトーク」を行うことで、自己を語り、友達とコミュニケーションをとる楽しみを味わわせたい。お互いの交友を深める機会となるとともに、聞き方・話し方の定着への一助ともしていく。話をするが苦手な児童生徒にも楽しく「話の聞き方・話し方」の練習ができるようにした。

【主な進め方の例】

Case 1 (学級活動)

- ① 全体を5人程度のグループに分ける。
- ② グループごとにサイコロ1個とワークシート

を全員に配る。

- ③ サイコロをふる順番を決める。

(例 誕生月の早い順、サイコロの一番大きい目の出た人から時計回りの順など)

- ④ サイコロを振って、出た目の内容について1人1分ずつトークを行う。
- ⑤ 全員実施後、感想を書いてもらい、数名に発表してもらう。

Case 2 (朝の会・帰りの会)

- ① 1日ごとに出席番号順にくじを引いていく。
- ② 引いた番号の内容について1人1分ずつトークを行う。
(小学生については前日のくじを引き、内容を知らせておく。)
- ③ 実施後、感想や質問を発表してもらう。

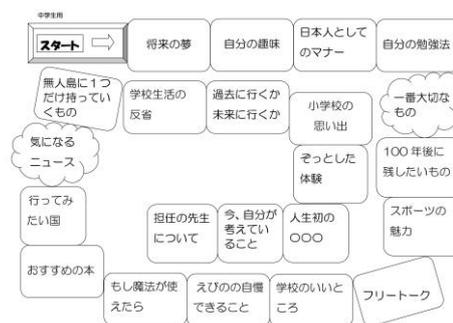
(4) 評価

ア 活用の仕方

スピーチ評価表は児童生徒がスピーチをするにあたり、どの程度のスピーチが出来るよいか、生徒側・指導者側のそれぞれが目標を持って取り組めるようにする目安になるものである。評価表は、国語科の学習指導要領を参考に用いながら、小学校1年生から中学校3年生までの系統的な内容を一覧にまとめている。児童生徒においては、例えば、事前指導としてこれまでの自身のスピーチ活動について振り返ったり、所属する学年の目標を明確にして自分のスピーチ活動を自己評価・相互評価したりする取組が考えられる。指導者側においては、評価の項目を一覧にすることで、児童生徒がこれまでどのようなスピーチ活動に取り組んできたのかを把握することができる。また、各学級の児童生徒の実態・発達段階に応じて基準目標を選択して提示したり、独自で評価表を作成する場合に評価項目の参考資料として利用したりすることもできる。



資料2【高学年用すごろく】



資料3【中学生用すごろく】

イ 記入方法

スピーチ評価表は、「話す内容」13段階・「話し方」10段階（資料4）、「聞き方」11段階（資料5）を設定している。記入方法は「◎…よくできる、○…だいたいできる、△…もうすこし」の3段階評価としている。スピーチに自信を持たせるという観点から「×」は設けていない。

スピーチ評価表 名前【 】

レベル	話す内容	◎○△	レベル	話し方	◎○△
1	「いつ」「どこで」「だれと」「なにを」「どうした」などの話型を使って話す。		1	聞いている人に体を向けて話す。	
2	「はじめに」「つぎに」「さいごに」などの接続語を使って順序を明確にして話す。		2	背中をまっすくにして顔を上げて話す。	
3	「一つ目は」「二つ目は」「三つ目は」のようなナンバリングを使い、話の要点が伝わりやすいように話す。		3	口を大きくあけ、お腹から声を出す。（声の大きさ）	
4	理由を挙げながら話す。		4	ていねいな話し方で話す。	
5	調べたことなどの事例を挙げながら話す。		5	話す速さや音量に気を付けて話す。	
6	話のテーマをはっきりして話す。（はじめに最も伝えたいことを話す。）		6	言葉の調子や間のとりに気を付けて話す。	
7	具体的な事実（写真や資料）を示しながら話す。		7	相手に応じてわかりやすい語句を選んで話す。	
8	人名や地名、ものの名前や数値なども具体的に話す。		8	相手や場に応じた言葉遣いなど、知識を生かして話す。	
9	最後に自分の意見や考えをまとめて話す。		9	必要に応じて共通語や敬語を適切に使って話す。	
10	相手の反応をふまえながら話す。		10	資料や機器などを効果的に活用して話す。	
11	異なる立場や考えを想定して自分の考えをまとめ、話す。				
12	話の中心的部分と付加的な部分など、話の構成や展開を考えて話す。				
13	語句や文、資料などを引用し、説得力のある話をする。				

〈 ◎…よくできる ○…だいたいできる △…もうすこし 〉

資料4【スピーチ話し方評価表】

スピーチ 聞き方評価表 名前【 】

レベル	聞き方	◎○△
1	せずしをのぼして聞く。	
2	話す人の目を見ながら聞く。	
3	「なるほど」と思うところでうなずきながら聞く。	
4	大事なことは何か、考えながら聞く。	
5	もっと詳しく知りたいことはないか考えながら聞く。（質問を考えながら聞く。）	
6	メモを取りながら聞く。	
7	大事なことだけを短い言葉でメモする。	
8	記号や番号を使って、相手の言いたい事を整理してメモする。	
9	自分の考えとの共通点を考えながら聞く。	
10	自分の考えとの相違点を考えながら聞く。	
11	自分の考えと比較して聞く。	



〈 ◎…よくできる ○…だいたいできる △…もうすこし 〉

資料5【スピーチ聞き方評価表】

3 各学校における実践

以上のような、計画に基づき、実践が効率的に進むよう市内の全学級にすべての資料を収録したファイルを配付した。

各学校における具体的な実践を以下に紹介する。

(1) A小学校における実践

ア 『スピーチのもと』の活用

記事の内容について自分の考えを述べるスピーチ活動を継続して行う際、自分の選んだ新聞記事等の資料をもとに、『スピーチのもと⑦』を活用した。児童は話したいことを整理し、自信をもって話すことができ、聞き手にとっても話し手の意図を捉えながら聞くことができた。



資料6【「スピーチのもと」の記入例】



【資料を示しながら発表する児童】

イ 『スピーチ評価表』の活用

既存のスピーチ評価表の中から、指導内容及び発達段階に応じた項目だけを取り上げ、話し手と聞き手に評価させるようにした。『指導のポイント（教師用）』及び『スピーチ評価表』を参考に、児童の発達段階や指導目標に応じた項目を教師が取り上げ自己評価させるようにした。また聞き手には、大事なことは何か考えながら聞いたり、質問を考えながら聞いたりすることで話し手の意図をつかませるようにした。



スピーチの聞き方をふり返ろう

名前 ()

	話す内容	◎○△
1	大事なことは何か、考えながら聞く。	○
2	もっと詳しく知りたいことはないか考えながら聞く。	○

一言感想
 ほとんどの言葉ができとくに使ったりしているので、しっかりと
 言葉の意味を理解しながら使っています。

【評価表にメモを取りながら聞く児童】

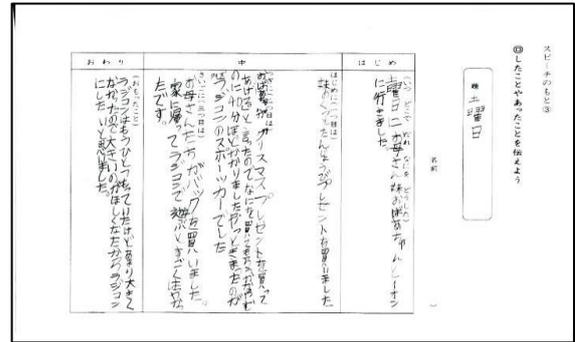
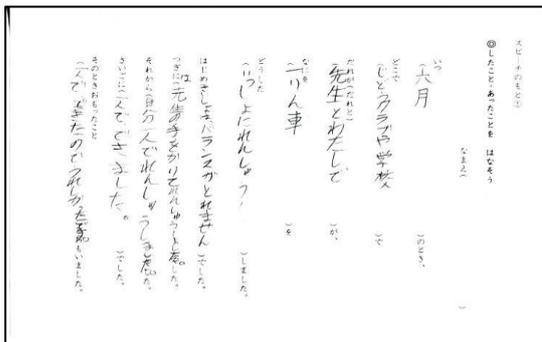
資料7【「スピーチ評価表（改）」の記入例】

(2) B小学校における実践

ア ワークシートの活用（三年生）

「スピーチのもと」の①～④の中から児童が自分で選択し、スピーチの原稿を考えさせた。児童にはあらかじめ①②は低学年、③④は中学年レベルと伝え、自分が伝えたいことに合わせて選択するようにさせた。児童自身はあまりレベルを意識せずに書きやすい物を選択したり、上級レベルにこだわってがんばって原稿作りをしたりする様子もみられた。

スピーチを実際に行う際には、原稿を見ながら話す児童、原稿を確認する程度に見て話す児童、原稿に頼らず話す児童、それぞれであった。一日一人ずつの朝の会のスピーチであるため、スピーチのテーマが時期はずれになることもあったが、話すことが思い浮かばないときには、古い原稿を頼りに話すことにも活用させた。



資料8・9【「スピーチのもと」の記入例（上）と活動の様子（下）】



イ 「指導のポイント」・「評価表」の活用

どちらも、どのような観点でスピーチに取り組ませるか意識することができた。話し方・聞き方のポイントを児童にも伝え、児童自身にも意識付けさせることが出来た。

(3) 他校の実践

- 「すごろくトーク」を用いてスピーチのテーマを決めることで、話し手は聞き手を楽しませようという意識でスピーチ内容を考え、聞き手はスピーチの内容をより楽しみながら聞くことができた。
- 「スピーチのもと」のワークシートに、テーマに応じて無理なくスピーチ内容を記入させることで、筋道立てた分かりやすいスピーチが抵抗なくできるようになってきた。
- 児童生徒の話す機会を増やすために、代表者のスピーチの前に、3人1組のグループ内で全員がスピーチをする時間を取り入れた。

V 成果と課題

1 成果

- 1年次より継続研究している「学びの基本づくり」の中でも、3年次の研究内容と特に関連の深いスピーチ活動について、実践的な研究を行うことができた。
- 作成した資料やワークシートを活用した具体的実践が広がってきている。
- 各学校の実態や児童生徒の発達段階に応じた創意工夫のある実践が広がってきている。

2 課題

- 話す力の育成は徐々に図られてきているが、今後はさらに双方向性のあるコミュニケーションへと質的に高めていく必要がある。
- 次年度はスピーチ活動を、学級単位での取組から、校内の全職員での、より組織的な取組となるよう啓発をしていきたい。
- スピーチ活動で培った力を活用することで、各教科の言語活動の充実につなげていきたい。

◇ 引用・参考文献

- ・『学習指導要領』（平成20年／文部科学省）
- ・『平成19年度 久峰中・広瀬西小・広瀬北小 小中連携資料』
- ・『くまもと「親の学び」プログラム スマイル（小学生期）編』（熊本県教育委員会）

◇ 研究同人

所 長	萩原 和範（えびの市教育委員会教育長）	研 究 員	檜畑 文範（えびの市飯野小学校教諭）
主 幹	堂 蘭 充郎（えびの市教育委員会主幹）	研 究 員	押川 博重（えびの市立上江小中学校教諭）
指 導 主 事	中村 敏彦（えびの市教育委員会指導主事）	研 究 員	木下 喜史（えびの市飯野中学校教諭）
主 任	高橋 慎一郎（えびの市立岡元小学校教頭）	研 究 員	長友 伸二（えびの市立上江小中学校教諭）
研 究 員	松元 洋子（えびの市立加久藤小学校教諭）	研 究 員	神井 恵（えびの市立加久藤中学校教諭）
研 究 員	斉藤 寿子（えびの市立真幸小学校教諭）	研 究 員	黒木 裕次（えびの市立真幸中学校教諭）